ダンジョンに緑のアイツが出没するのは間違っている

サンマ味のヨーグルト

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

最大の【迷宮都市】と謳われている程の賑わいを持つ、都市オラリオ。

そのオラリオに自らの将来に希望を見つける数の絶えない冒険者志望の人間達

日夜彼らは迷宮都市と言われる由縁の地下迷宮、ダンジョンに潜る。

そしてそのオラリオに、あの男が現れる

緑の服と緑のマントを身に纏い、澄み渡る程の綺麗な眼に大きな口

漆黒の剣を片手に持つ彼の名は――――――――

「うむ。ここがオラリオとやらか。かわいい子が居るではないか…グッドだ」

これは後に英雄と呼ばれる男の物語である

目次

第1話 …… 1
第2話 …… 9

第1話

太陽が沈み始めた頃、夜は刻々と迫っている時刻

平原の傍にある集落、村と言った方が正しいか、木造の家がちらほら見える。一軒一軒離れているが、住民は６０を超えているのだろう

街灯のない村は夜が近づく前に仕事を終わらし、家に帰る。そう、夜に出歩く人間なんていない筈だ。この村には酒場は無い

しかし村の東にある門の近くに、二人の男が立っていた

夜に関わらず二人は言い争っていて煩い筈なのだが何故か村の住民が野次として見に来ることは無かった。

争っている二人の内片方は、初老の老人だった。老人といっても腰は９０度にピンと立っていて、齢１００を超えても死にそうに無いほどに健康的だった。もう一人を警戒しているのか手には鍬を持っている

そして片方は栗色の髪をした青年。何故か服を緑一色にしている顔は２枚目で何処か野生を感じさせる顔つきだった。彼は冒険者なのだろうか、腰に剣を下げている

「貴様は何度言っても問題を起こしてばかりで！この前も村長の嫁入り前の娘さんに手を出しおって！貴様にはモラルという物がないのか！最早獣じゃ貴様は！」

二人のボルテージは見ただけで一触即発だと判別できる。今にも剣で殺し合いに発展しそうだ

恐らく巻き込まれたくないという理由で村人は家から出てこないだけなのか

「あれはセラの姉ちゃんとの合意の上の行為じゃ耄碌ジジイ！頭皮とともに考える脳まで亡くなったか！」

「なんじゃと?!なら３か月前に泣きながら帰って来たライラの嬢ちゃんはどうなんだ！」

「あれは俺様を誘惑したライラちゃんが悪い！だから俺様は悪くない

のだハゲジジイ！」
　自身に罪は無く、相手が悪いと言い放った青年の言葉に怒りのパラメーターが振り切れたのか、老人は最終手段を言い放った
「〜〜〜〜〜〜〜〜!!!!もう我慢ならん！さっさとこの村から出ていけ!!それと儂には髪はまだある！」
　青年の発現に激昂し、老人が鍬をブンブン振り回し、青年に斬りかかる。その動きは老人というよりは一人の戦士を彷彿させる動きだ。老人の恰好は農家のソレなのだが……
　どうやら片方の青年が村で問題を起こしたようだ。しかもかなりの数を。
　老人は問題児を面倒見切れなくなったのか、青年を強引に村から追い出そうとしているようだ。確かに彼を追い出すだけでこの村には平穏が訪れるのだろう
「誰がこんな僻地に居てやるか！俺としても外に出れるのは万々歳じゃ！」
　青年は口の汚さの割に精練された動きで老人の攻撃を回避する。
　青年としてもこの村から出るのは吝かな事ではないのだろう。少し怒りが収まっていて、声には嬉しさが感じられる
　出て行かされることに対する怒りよりも命令されることが嫌いなのだろう
「二度と村に帰ってくるな!!!」
「うるせー！誰が皺くれた爺に頼まれても戻ってくるか！後で戻ってきてくれと懇願しても許してやらんぞ！」
　門から数m離れた青年はそう言い切り、身を翻して村から走り出した。その足取りは悔しいという感情ではなく、愉しいという足取りだった。そして夜に関わらず、灯りも無く、魔物とあっさり遭遇しそうな大声を、喜びの声を無邪気に挙げていた
「がはははははは!!待っていろよ未だ見ぬ世界のかわいこちゃん達！俺様が会いに行ってやるぜーーー!!待ってろよーーーー!!」
　青年が走り出した時間は一分も経っていないのにも関わらず、青年の姿はあっさり平原から見えなくなった。

驚くべき程の脚力である

「ふー……ふー……はあ、やっとどっか消えたわい」
老人はスタミナが切れたのか、肩で息をしており、息も絶え絶えだ。残り少ない髪は額にへばりつき、見るだけで少し残念な気分となる。しかし顔はやりきった。と済々したような色をしていた
「あいつが居るだけで問題は起こすし、何故か女子供は大体アイツの味方をするし、子供たちの教操に悪いし……生きてるだけで害があるわい」
老人は青年が走り去った先を睨み、ぽつぽつと呟き始めた。その顔は先ほどの嫌悪する顔から一変し、面白いモノを見るような表情だった
「村八分のような環境で7年もあんな性格で押し通すとは逆に凄いわい……あんな子供は見た事が無い……まるで世界のバグのような男じゃ」
そう、青年は昔から問題を起こしていた為。村から忌避されていたのだ。食料を与えない、集団無視など。しかし青年は気にせず、いや寧ろ気づいていないという感じで村で生活していたのだ。
親も居らず、孤児としても関係無く、天真爛漫に生きている彼の生き方は

老人が知っている中で、最も逞しい、いや愚鈍な人物なのだろう彼は

老人は、青年が去った方から向き直り、一人になった孫が待つ家へと帰って行った。
実は青年は老人と孫と暮らしていたのだ。確かに老人は青年の面倒を見ていたが、青年自身は此処は自分の居場所ではないと一人暮らしをしていた。
故に老人は気に留めている扱いだけにし、青年を放置しておいた

が、
青年を邪険にしていた老人にとっては問題を起こすけど可愛い孫。と実は内心思っていたのだが、青年が知る余地は無い。
「おじいちゃん！お帰り！」
家に帰ると一人になった孫が出迎え、老人の帰りを喜んでいた。老人も眉間の皺を解き、笑顔で孫が作った夕食にありついた
「あれ？おじいちゃん。お兄ちゃんは何処なの？もう晩御飯の時間だよ？」
孫は青年の姿が見えぬことを疑問に思い、老人に直接疑問をぶつけた
「あいつは村を出て行った。もう戻ってくることもないじゃろう」
老人は無骨に青年が村を離れたと、言い放ち、孫を言い聞かせた
孫は青年に懐いていた。問題ばかり起こす青年だが、何故か子供に好かれていて、どんなに青年が邪険にしようと、どんなに大人達が子供に言い聞かせようとも、子供たちが青年を嫌う事は無かった。
ここで丁寧にアイツが悪いので追い出したとこつこつ子供に言い聞かせたとしても、子供たちは大人に刃向かい、一方的に青年を追い出し、彼は悪くないと決め付けるだろう
青年を追いかける可能性もある。
故に一言で済ませた。後に子供たちに少し嫌われる可能性のある言い方ではあるが、青年自身が村を自主的に出て行ったと言う方が青年を追いかけて危険に遭う可能性は無い。そう思い老人は孫に無理やり納得させた。
しかし孫の発言は違った。
「やっぱりお兄ちゃんはやっぱりここでゆっくりすることは無かったんだね」
意外である。孫は同世代の子供に比べ、泣きやすく、非常に打たれ弱い性格だったのだ。青年に一番に懐いていたのも孫である。
「ほう、何故そう思ったんじゃ？」
老人は思わず孫に尋ねた。確かにじっとしていられない性格だったとしても、孫が言ったニュアンスが少し違う気がしたのだ

「うん！だってお兄ちゃんはおじいちゃんから貰った英雄譚に出てくる登場人物にそっくりなんだもん！」
　孫が片手に持つ、英雄譚。それは老人が孫の誕生日に与えていた絵本であり、孫の宝物だった。実は老人が自作で作った絵本なのだが、孫が知ることは無い
「は？あんな男、絵本には載っていないぞ？アイツの人柄は大体ギルドで絡んでくる三下じゃぞ？一体誰にそっくりなんじゃ」
　老人はえ？どこが？とびっくりし、孫に問い詰めた
　そして孫はこう答えた
「――――――英雄！だってすごく強いし、カッコいい！」
「は？」
　老人は今までかつてないほど目を見開き、顎が外れそうな程口をあんぐりと開いて、唖然としていた。
　持っていたフォークを落としていて、腰を椅子から少し上げている。
「あいつは英雄なんかじゃないわいさっさと寝なさい――――――ベル」
　そして残念なモノを見る目で、孫の名を呼んだ。老人は落としたフォークを拾い、孫の見る目の無さに哀願を抱いた
「……【ランス】が英雄なんぞ天地がひっくり返ってもありえんわい」

　青年の名は、【ランス】。
　栗色の流れるような髪に、澄み渡る綺麗な眼、彼は自由な風を彷彿させる性格であり、誰も彼を抑えることは出来ない。
　故に彼がこれから起こす騒動は、老人であっても見抜けなかった

「あ、忘れてたけどおじいちゃんが大切に持っていた剣、お兄ちゃんが持って遊んでいたけど、ちゃんと返してもらった？」
「なぬぅ?!あ、無い！儂の剣が無い!!……あいつううううう

ううううううう!!!!」

☆☆☆☆☆

俺様の名はランス。皆のスーパーヒーローランス様だ

実は俺様はかわいそうな事に村を追い出されたのだ。あのクソジジイめ、ちょっと女の子にスケベな事をしただけで怒りおって。心が狭すぎだ！

ただセラの姉ちゃんとライラの嬢ちゃんとエミーゼとカレンとリアに手を出しただけではないか。

そのうち血管が千切れてポックリ逝くぞ？

まあいい、ポジティブな俺様は村を追い出されたくらいでは挫けんのだ。この機会に世界中のかわいこちゃんとイチャイチャするのだ！

そうそう、実は俺様前世の記憶があったのだ。まあだからなんだ？と思った奴、今すぐ切り殺してやる。大事な話に茶々を入れるな。

うむ、では説明してやる。

実は前世の俺様は普通のサラリーマンだったのだ。何の変哲もない平凡な男だ。今思うとかなり人生を損しているな。うん。

毎日糞つまらない会社に行き、道中絡んで来たヤンキー共をゴミ箱にドッキングし、家に帰り勉強する。そして時折泡の名前が付く店に通い、また絡んで来た酔っ払いを線路にドッキングさせる

昔は普通の人生だと思って何の感慨も無かったが、いつかあの人生に戻ると思うと鳥肌が立つな。

そして神と名乗る姉ちゃんに出会ったのだ。確かＡＬＩＣＥとか言っていたが今はどうでもいいな

その神の姉ちゃんに人生詰まらなくないか？と言われ、俺様はこう

答えた
「だから何だ。俺の人生に文句でもあるのか」と。カッコいい発言かも知れんが、あれで決まったと俺も思ってしまった。
うむ、そう偉そうに言ったら姉ちゃんが俺様の首を切り落としたのだ。
激痛に悶える暇などなく、意識を保たせたまま、俺様の足から1㎜ずつスライスし、見えた部位を丁寧に解説されるという恐怖の光景を無理矢理見させられた。あれはトラウマランキング1位だぞ
散々弄ばれた挙句、姉ちゃんは詰まらなそうな顔をしていたので俺様は叫びながら聞いた
何が目的だ。と
そして、姉ちゃんは転生してみないか?と言ってきた。
ぶっちゃけ俺様は激痛で何を言っているのかさっぱりわからなかったので。適当に何でも良いと答えた……気がする
すると意識がブラックアウトしたのだ。俺は思った。あ、やっぱり死んだ?と

しかし目が醒めると。よくわからない村に居た。
どうやら俺は親に捨てられ、この村で数年過ごしていたそうだ。俺様がこの事を知ったのは、6歳の熱を引いた時だ
今までの記憶の奔流に戸惑い、訳も分からない状況だったが、俺様は悟った

俺イケメンじゃね?あと転生してね?いやこれ憑依か?

前世では暇つぶしにネットで遊んでいた為、こういう展開はなんとなく理解できた。いやしかし嬲ってから転生させる神なんぞ知らんぞ。
だが転生したという事実がある以上、ここで燻っていても意味が無い。だったらハッチャケよう!と考え、好きに過ごしてきた。
かわいい姉ちゃんだな!冒険とは面白そうだな!ダンジョンとか

ワクワクするな！と
毎日見慣れぬモノを知り、ワクワクしていた。

そして俺は童貞を卒業した時にようやく思い出した
自身の名前と容姿が
前世から知っている人物と同じである。と
そして一人称を俺様に変え、服は緑に拘る。剣を練習し、気に入らない連中をぶっ殺し、いつの間にか村では最強の存在となった。
子供はわらわらとウザいが雑用させると便利だ。好かれて嬉しいのは美人の女の子だけで子供に好かれても嬉しくないのだ
村の男衆、ジジイには嫌われているが男なんぞどうでもいい。用があるのか美人の姉ちゃんだけだ。

俺様の名はランス。
鬼畜戦士と名高い。スーパーヒーロー・ランス

今から俺は、モテモテになる旅に出る!!!

「がはははははは!!俺様の冒険が今始まるぜえええ!!」

そして俺様は、平原を抜け、山の登りはじめた。ここを超えるとデカい町がある筈だ

ついでにジジイの剣をパクったが、あまり溜飲は下がらんな

第2話

夜の帳もとうに落ち、鈴虫がけたたましく鳴いている夜中と言える時刻。夜に活性化する魔物たちも休眠状態に移行し、最早動物は活動していないと言える環境の中、喧しく歩き回っている人影が見えた

その男は、緑一色に染めた服を身に纏い、腰には煌びやかな剣を下げている

「迷ったぞ」

ランスである

ランスは村から飛び出した後、平原を抜け、山を登ったのだが慣れぬ山登りと、夜目が効かないことから、あっさりと迷ったのである。自身の方向感覚を信じて適当に歩き進めているが、どんどんと違う場所に進んでいるのには気づいていない

「ベルめ……話が違うではないか！何が町には山から歩きで6時間だ！もう5時間も経っているのに見えもしないぞ！だからお前は兎なのだ！男なら狼にならんか！」

ランスは責任を子分……ベルに押し付けている

確かにベルの言ったことは正確ではない。だが彼はまだ子供であり、村から出たことも無い

これはランスの適当さ加減が災いしているのだが、全く悪びれも無い

「ぬお！蜥蜴を踏んでしまった！」

「ほへ～～～。やはりパンパンに溜めてからの立ちションは最高だ～～～」

等々。

ランスは踏み潰した蜥蜴に腹いせに小便を掛け、溜飲を下げたが、迷っているのは相変わらずだった。

そしてもう夜中になり、就寝時間になったが、全く町が見える予感のないランスは地団駄を踏んだ。全力で踏んだ場所には犬の糞が落ちていたのだが、夜に視界が悪いのと頭に血が上ったランスは気づく

ことは無かった
「むむむ……もっと早くに町に着きたかったが……仕方がない、今日はここで一泊だ」
ランスは仕方なく、近くで一番高い木に登り、安全を確保してから眠りに就いた。
ランスの不思議頭に浮かんでいるのは、世界中の美人、女性の事であった。
「ぐへへへ、俺様モテモテ～～ｚＺＺ」
自身がモテると信じて疑わないランスはハーレムの夢を見ている。
世界で最も素晴らしいと謳われる偉業、黒竜を討伐、囚われの姫を颯爽と助け、求婚される。戦国大陸を統一する。等々

しかしランスは知らない……
自身よりもっと強く、モテる人物は上には上が居る事を……

「むにゃむにゃ……ぐ～すかぴ～～～」

きっと彼が知ると、喜々として闇討ちに出かけることだろう

☆☆☆☆☆

日が昇り、人々が活動し始める時刻、珍しくランスは朝早くに目覚めた。
実は彼は毎日惰眠を貪る村一番の怠け者ではあったが、剣の稽古と遊びに関しては早起きをする子供のような性格だった。
そして今日は、剣の稽古以外での珍しい早起きであった。
何故なら堅苦しい村から脱出でき、自由に活動できる生活が待っていたからだ。さながら連休にワクワクする少年である

「……んお、朝か」
ランスは口から滝のように流れ出る涎を拭き、木から飛び降りた。
欠伸を噛み締めながら朝食を作る。
朝食は村からパクった干し肉を噛みながら、適当に鍋で干し肉と少量の塩を投入し、煮汁を作る。水は昔村で作った木製の水筒に確保してある
こう見えてランスは器用である。ノミで大木からこつこつと毎日水筒を彫った事もあるのだ
あまり料理は出来ないが、最低限の料理は出来る。これは冒険者の必須項目でもある。
「朝食とはめんどくさいな……誰かに押し付けたいぞ……」
そしてこの干し肉は、10年以上前から出没し始めた〝男の子モンスター〟と呼ばれている一種。〝バンバラ系〟〝ぶたバンバラ〟の干し肉である。
男の子モンスターとは、謎の多いモンスターである。現れた原因もわからなく、魔石の価値は高いものの、生殖体系・生態系が謎に包まれているのだ。
一説ではヒューマンの女と交わり、子を成すと言われているが……
そしてバンバラ系の肉の栄養価値は高く、魔石を落とすだけでなく、豊富な栄養を持っていることから高級食材として扱われている。
ぶたバンバラはバンバラ系の中では最下位に位置するが、それでも栄養豊富であるので、高い。
もっとも、ぶたバンバラは何処にでも出現するのだが……

『……！……ア……!!……！……』

「なんじゃ……？」
ランスが味の薄いスープを辟易しながらすすっていると、争うような騒音が耳に入る。
ランスには全く関係の無い事なのだが、ランスの美少女センサーが反応する。先に美少女がいる。と

「うっほほ～い！待ってろよ美少女ちゃん！俺様が颯爽と助けてやるぜーーー！」
ランスは腰に携えた、村で老人からパクった【名剣・ヒデオの剣】を鞘から引き抜き、野山を走った。
明らかに剣を鞘に戻した方が邪魔にはならないのだが……ランスは気にしてはいない。

段々と喧騒が近くなる、自身の邪魔となる木々を切り倒し、騒動の中心へと向かう。
ランスが走ったその距離は、６００ｍ以上と離れていたのだが、恐るべき聴力である。中心点に一直線に向かっている。
「ここだあああ!!どこだ俺の……む？」
死臭が鼻孔に突く。誰かが殺されたという事だろうか。魔物か、ヒューマンか
「見つけた……!!」
鬱蒼とした木々を伐採したランスの目の前に飛び込んできたのは、２ｍに及ぶ巨体の怪物であった。

頭は牛となっている牛頭のモンスター。恐ろしいほどに鍛え上げられた筋肉を身に纏っている。
辺りには散乱した荷物が散らばっていて、女性の死体が見える。近くに馬車が倒れていることから、商隊の護衛であり、
女性はこの魔物に挑んで死んだのだろう
「ア……ァ……助け……」
助けを求める声が聴こえる……が目の前に居るモンスターに隙を見せることは出来ない。

ミノタウロス
迷宮都市オラリオではＬｖ：２のランクを持つ二級冒険者のランクに相当する冒険者に対して討伐が推奨されている

謂わば新米冒険者の最初の壁。その力強さに怯え、冒険者を辞める者も多い。
しかしそれを乗り越えた者にはその魔物が持つ力が籠った魔石と角を手に入れられる。故にこの魔物に対して挑戦する冒険者は少なくはない。
別に怯え、逃げるのは卑怯な事ではない。力が無いので集団で戦うのも、賢しく退却するのも、一つの手だ。死にたがり以外の冒険者にとって逃避は謂わば常識なのである
それが【神の恩恵（ファルナ）】を持っていないランスの前に現れた。先ほど言った通り普通なら怯え、退避に専念するか、遠距離での魔法を使い、安全に退治する手があるのだろうが

ランスは違う
「くおらあああ！家畜畜生風情があ！世界の宝の女の子を殺すとは何様のつもりだあ！俺様がぶっ殺してやる!!」
目の前の魔物に対する恐怖よりも、女性が死んだことに対しての怒りが上回っているのだ。これは死んでも治らないだろう、だがこれは美点でもある。
ランスの罵声に気付いたのか、ミノタウロスはランスの方に振り向く、その重圧と悍ましい顔は、Ｌｖ．１ですらないランスにとっては心臓が止まる程の恐怖である。
ミノタウロスが口を開く
警告の雄たけびを挙げるのだろうか
食事の邪魔をされた怒りの咆哮を挙げるのか

一体――――――――

「みゃ～みゃ～」

…………………………………………。

「みゃ～みゃ～」

「……………………うしバンバラではないか」

うしバンバラ。

男の子モンスター科バンバラ系に登録されているモンスター。

うしバンバラはその筋肉隆々な身に反して、特徴的な鳴き声を発し、うしバンバラから取れる肉は非常に美味であり、高級食材として店に並んでいる。

その値段はぶたバンバラが１００ｇ、１０００ヴァリスに対して、うしバンバラは１００ｇ、２００００ヴァリスである。

最も人気なのが、バンバラの舌と肝臓である。特に生レバーを食べたものは虜になると言われている。

だがうしバンバラが産まれる確率は低く、養殖体制も安定していない事から、食卓に並ぶのは稀である。

それがうしバンバラが高級食材として扱われる由縁であろう

そしてうしバンバラの力は

「みゃ～みゃ～！」

「ぬが!?」

――――――――――ミノタウロスよりも恐ろしい

ランスは一瞬の内に間合いを詰めてきたうしバンバラに咄嗟に反応し、剣を斜めに構え、右手を添えてガードしたが、うしバンバラの強力な膂力に吹き飛ばされた。

３ｍ以上も宙に浮いたランスであったが、呆けることはなく、ダ

メージを減らしながら着地し、うしバンバラに突撃した。

「死ねええ!!」

言っていることは全て三下の言葉ではあるが、ランスは結果を出す男である。言わば有能な下種。

ランスが持っていた剣を両手で持ち、頭から振りかぶり叩きつけるように斬りつけた。唐竹割とも言えるこの行動ができたのはランスの素早さと、うしの鈍重さのお蔭であろう

「みゃ～」

しかしうしには効いている感触は無かった。

うしは両腕を交差させ、砦のような程の堅牢な筋肉ガードを使ったのだ。

ランスが放った攻撃は、重厚な筋肉に止められ、全くダメージが入っていない。腕にうっすらと切り込みが入っただけだ

ランスは危険信号を発した脳に従い、後ろに跳躍し、距離を取った。うしバンバラはガードを解き、つぶらな瞳でランスを見つめている

「あのクソジジイ!!何が名剣だ!全くダメージが入っとらんではないか!大体【ヒデオの剣】という名はなんなのだ!全く強そうに見えんぞ!!」

ランスがパクった剣。それは【名剣・ヒデオの剣】と言われている

鍬しか武器に使わなかった老人が大事にしまっていた剣である。ベルから聞いた話では、ますぞえと言われている巨大モンスターをこの剣で殺したという逸話を持っていると聞いていたが

「うしバンバラにすら効いていないではないか」

ランスは文句を垂れながらも、うしバンバラの攻撃を避けている。

うしバンバラの大砲を彷彿させる右ストレートを、左の軸足で半身して紙一重に回避し、その遠心力を応用して、うしバンバラを斬りつけた。

「みゃあ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛!!!!」
「やかましい!!」
断末魔が聴こえた。耳元で騒がれたランスは駄目押しに脛にヒデオの剣を突き刺した。
ランスが斬りつけた部位は、万物生物の弱点となる眼だった。ランスに斬られた眼は完全に潰され、片目の見えない手負いとなった。そして突き刺さった脛は柔らかく、片足を使えない状態となり、ランスのチャンスになった
「死ねィ!」
「みゃあ?」
眼を抑え、苦しんでいるうしバンバラ対し、ランスは首を刈り取るように、ヒデオの剣を横薙ぎした。ゴブリン等、一般モンスターであるならここで戦闘は終わるだろう。
しかしレベルという隔絶した差でランスの剣はうしバンバラの首に切り傷を入れただけであった。うしバンバラは斬られた影響で痛みを振り切り、目の前の敵に集中することにしたようで、丸太のように太い腕をぶんぶん振り回した
「ぐぬぬ……うしの癖にィ……」
ランスは振り回されている腕の重圧に少しビビり、後ろに退避した。

普通、モンスターに対しては【神の恩恵(ファルナ)】という加護を持ち、それを以って討伐するというのが常套手段であるが
昔は恩恵という物も無く、自身の武器と腕で戦うのが常識であったが、今は違う。
恩恵という学習装置無くては戦えないというのが常識となっているのだ

しかし
戦えないというわけではない。

勝てないというわけではない

「ふん……俺様がビビるとは……情けない限りだ。しかしこれで終わらせる。貴様を今日の晩御飯にしてくれるわ」

ランスは咄嗟に策を捻りだし、それを決行することに決めた。これが失敗すればランスの身体はうしバンバラに肉塊にされ、突撃明日はお前が晩御飯とされるだろう。

しかし、ランスはリスクを恐れない。

何故なら自分はここで死ぬとは思っていないからだ。

(脛が切れたのに首が斬れんのは何故か?……それはあいつが背中の筋肉のトレーニングを怠ったからだ。だから……)

ランスは策の実行の隙を伺いながら、うしバンバラのワンツージャブを避け、うしバンバラの死角、潰れた右目の視界に回り込んだ

「みゃ?!」

うしバンバラは唐突に消えた敵に、困惑したが、本能が告げたのか、ランスが回り込んだ方向に腕を突き出した。

だが

「馬鹿め!俺様は後ろだ!!」

ランスは横には居なかった。

ランスは横に回り込んだのではなく、後ろに回り込んだのだ

「つまり貴様は背中が弱点だ!死に晒せ!」

ランスはヒデオの剣を、渾身の力で振りかぶり、うしバンバラの背中を一気に切り裂いた。背中が弱点であったうしバンバラは、流石に格下のヒューマンの攻撃に耐えることも出来ず、切り傷しか残さなかった腕とは違い、アジの開きのように肉を裂かれた。

「みゃあ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛!!!!!」

うしバンバラは断末魔を挙げたが、倒れることは無かった

そして怒りの震えるままにランスに突撃したが、それこそがランスの策であった。

「ふん、読んでいたわ。死にかけている生物は生き残るために、傷を負ってでも敵を殺す。重量級のお前なら突撃だな……だから」
「みゃ?!」
ランスは笑っている。その顔は勝利を確信しているようだった。
突撃を中断し、正気に戻ったうしバンバラの目のに映っているのは、

ランスの横から倒れてくる巨大な樹だった

「ヘビー級にはヘビー級に任せるだけよ。がはは、恐れいったか」

うしバンバラは咄嗟にも背中の激痛に犯され、動くことは出来ずまんまと巨木に押し潰された。醜い断末魔が助けを求める声のように聴こえるが、ランスは樹を踏みつけて高笑いしている。
「がはははは!俺様最強!」

ランスはその後、うしバンバラから採取した魔石を懐に、肉を村で重宝していた豚の腸の素材袋に詰め、馬車の被害を確かめ始めた。
生き残っているのは男の商人と一人のキャットピープルと気絶しているエルフの少女であった。
「ありがとうございます!ここで死ぬことを覚悟していましたが、いやあ素晴らしい人が居るものですねえ。私感服いたしました」
「あ~。そうか(男に褒められても嬉しくないぞ……)」
「ありがとにゃ~」
「がはは、どうだ?惚れたか?」
「その発言で好感度ダウンだにゃ」
キャットピープルに釘付けになっているランスに無視された商人は猫撫で声でランスにすり寄っていくが、男とあまり会話したくないランスは適当にあしらっている。

ランスが辟易しているのを目敏く感じ取った商人は、本題を切り出した
「あの～そこでお願いがあるのですが、ランス様？私の馬車を……護衛してくれませんか？」
「何故俺様が男を護衛せねばならんのだ。さっさと消えろ」
「いやいや、唯ではございません。１００００ヴァリスを支払いましょう。ポーションも3つ付けましょう」
しかし商人は諦めない。ランスの性格を読み取り、報酬を高く設定し、下手にお願いした。
何故ここまで下手に出ることにしている訳は
うしバンバラを倒すほどの力を持つ冒険者とコネを作っておくという事と、負傷しているランスはポーションを付けると引き受けるという確信を持っているからだ。
これで懇意になれば一石二鳥である。
しかしランスは以外と強かである
「6だ」
「は？」
「６００００ヴァリスだと言っている」
「いえいえ、少し高すぎませんか？」
レベル1の４人の冒険者パーティーで一日働いて稼げる額は、おおよそ２５０００ヴァリスだと言われている
「何だ？貴様の命はそんなに安いのか？あ～あ、この馬車売ったら何万稼げるのかな～？」
暗に脅しである。見ての通り脅しである。
ランスは冗談で言っているわけではないと悟った商人は必死に説得するが……
「世色癌とかポーションとか一杯あるではないか。ここでお前を消せば数か月は生きていけるな。うん」
つんつんと剣を馬車に突き付けているランスに負け、
「もう、それでいいです……」

６００００ヴァリスを支払う事が決定した。
「がははは、利口ではないか。どうだアーニャちゃん。俺様と遊びに行かないか？」
「唯のクズだにゃ」
「がはは、照れるな照れるな」
「照れてないにゃ」

「所で、何処に向かうのだ？」
キャットピープルと乳繰り合っていたランスは馬車を操縦している商人に話掛ける
「……オラリオです……あそこは人が大勢いますからね……成功する人も……どん底に堕ちる人も……ぼくの様に……へへへへへへへへ……」
魂の抜けた商人はそう答えた

「オラリオはビックドリームを掴む為に挑む者どもが大勢いるにゃ」
「オラリオか……成功するビックドリーム……」
ランスは顎に手を当て、思考する。そして

「俺様にぴったりではないか!!金を稼いで女の子にモテモテ！正に俺様の為に存在するような国ではないか！早くとばせ！かわいこちゃんが俺様を待っているのだああ！」

「すぐ死にそうだにゃ」
こうして、ランスは迷宮都市オラリオに行く事を決めた。ランスには失敗することなんて一切無い
成功することが当然であると考えていた

ある意味、これが伝説の始まりであったのかもしれない

そして

「あれ？ミノタウロスは……？ここはどこですか？確か私……」
「おお、エルフちゃんが目覚めたではないか。うしバンバラなら俺様がやっつけたぞ」
「え？あ、そ、そうなんですか……あの、貴方は？一体…？」
「俺様はランス様だ。エルフちゃんのお名前は？」
「あ、助けてもらったのに、すみません偉そうに……私

――――――――レフィーヤ。〝レフィーヤ・ウィリディス〟っています」

これが
ランスとレフィーヤの出会いでもあった